

KURKKU FIELDS（クルックフィールズ）にみる 新しい「農」の展開

一般財団法人 都市農地活用支援センター 主任研究員 ^{ゆる} ^か 緩 鹿 泰 子

■クルックフィールズの概要

KURKKU FIELDS（以下、クルックフィールズ）は、千葉県木更津市の小高い丘と山々に囲まれた場所にある、「農」「食」「アート」が融合したサステナブルファーム&パークである。

クルックフィールズは、音楽プロデューサーの小林武史氏が同市で2010年に設立した「農業生産法人耕す(以下「耕す」)」が開場した「耕す木更津農場」の30ha（約9万坪）もある広大な農地にオープンした。「次の世代にも使い続けられる農地」を目指して10年前から実践している有機農業と平飼い養鶏をはじめ、太陽光発電、古材の再利用、排泄物や生ごみの堆肥活用など、さまざまな環境への取組みが行われている。

2019年11月の第1期オープン以降、「農業」「食」「アート」を軸に、広大な農場で消費や食のあり方を提供するとともに、サステナブルなアイデアが詰まった6つの魅力溢れるコンテンツ（「FARM」、「EAT」、「ART」、「PLAY & STAY」、「NATURE」、「ENERGY」）を展開している。

以下では、クルックフィールズの軸である「農」「食」「アート」についてご紹介したい。



写真：クルックフィールズのメインエリア

■「FARM」：食と農の循環

クルックフィールズ内には、約10数種の野菜を育てている「オーガニックガーデン」や、ハーブや食用花を栽培する「エディブルガーデン」がある。そこでは、野菜やハーブを収穫する農業体験のほか、収穫した食材をBBQで使用したり、持ち帰ることも可能となっている。

この「オーガニックファーム」や「エディブルガーデン」では、場内で飼育している家畜たち（水牛、ブラウンスイス、鶏など）のふん、落ち葉や雑草などを堆肥化し、畑の栄養にする循環型農業にも積極的に取り組んでいる。また、鶏の餌には豆腐工場から出たおからや、出汁工場からでた鰹節、県内飼料米など地域の様々な未利用資源を活用し、地域内における資源循環にも取り組んでいる。

前述したように、「次の世代も使い続けられる農地へ」との考えのもと、「持続可能な社会づくり」に寄与している。



↓農場で育てられている
秋まき小麦

↑エディブル
ガーデンで
収穫された
ハーブなど



写真：「KURKKU FIELDS Story」より引用

■「EAT」：無駄をなくし、おいしくいただく

コンテンツ説明で「自然が育ててくれた恵みを新鮮なままテーブルへ」とあるように、収穫される四

季節野菜や卵、チーズなどの加工品はそのまま販売されるだけでなく、ダイニングやベーカリーなど場内のお店で味わうことができる。

ベーカリーでは、家製酵母を使った焼きたてのパン、農場の平飼卵や野菜のほか、地元で生産された農産物の加工品（写真①、②）なども販売している。また、シフォンでは名前の通り、農場の平飼卵とブラウンスイスのミルクを使用したふわふわのシフォンケーキ（写真③）とプリンを販売している。ひときわ目を引いたのが、イノシシやシカと野菜を使用したソーセージ、本州で唯一飼育されている水牛のモッツアレラチーズなどを販売するシャルキュトリーである（写真④）。「無駄をなくし、すべてを循環させ生かしていく」クルックフィールズの恵みが詰まっている場所となっている。ここで販売しているランチボックスには、シャルキュトリーのジビエのソーセージのほか、場内の各店のおすすめメニューが入っており、農場の恵みが一度に堪能できる（写真⑤）。



写真①

写真②

写真③

↑ベーカリーで販売されている野菜など
←シフォンで販売されている商品

←シャルキュトリーの商品

写真④

写真⑤

■「ART」：現代アートと自然との融合

クルックフィールズでは、農場の恵みをおいしく

いただくだけでなく、自然とアートが織りなす空間を楽しむことができる。

世界的に有名なアート作家の草間彌生氏がこの施設のために制作した作品をはじめ、名だたる現代アーティストの作品が展示されている。場内でひときわ目立つのは、草間氏の「新たなる空間への道標」という作品である。その名の通り、場内のシンボルマークのように存在感を放っているが、その奥にある畑や牛舎などとの景色とうまく融合されている。

場内を散策しながら、多数展示されている個性的なアート作品の写真を撮るのも良いが、自然を背景に撮ることで、いろんな風景を楽しむことができる。また、写真映えするような作品が多くあるため、SNSのための写真を撮ることができそうなスポットとして、若年層も楽しめる空間となっている。



写真：草間氏作品「新たなる空間への道標」

■さいごに

近年、「食」と「農」をテーマにした施設が多く展開している中で、クルックフィールズの「アート」は、ほかの施設にはない魅力の一つといえる。また、クルックフィールズは都心からほど近い場所にあり、自然の豊かさや食を五感で体験するだけでなく、開放感があるため、リトリート（仕事や日常生活から一時的に離れ、疲れた心や身体を癒す過ごし方）目的で、県内外からの集客が見込まれる。

アフターコロナにおいて、人との距離を気にすることなく過ごせる場所へのニーズが高まっている中で、今後、クルックフィールズのような新しい「農」が展開を見せていくと考えられる。

参考・引用

クルックフィールズ HP (<https://kurkkufields.jp/>)

「KURKKU FIELDS Story」NO.1~4（園内配布のタブロイドマガジン）